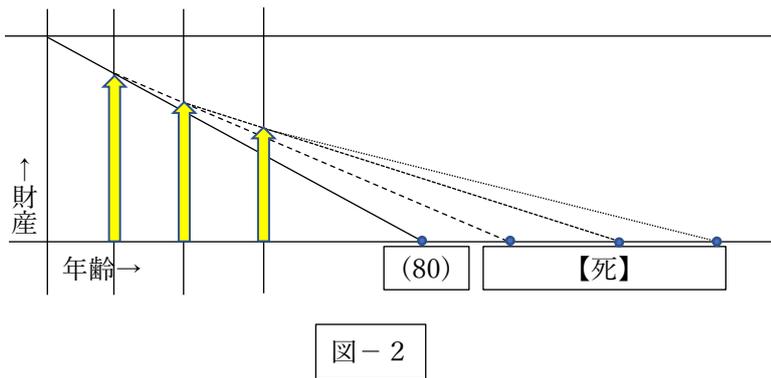
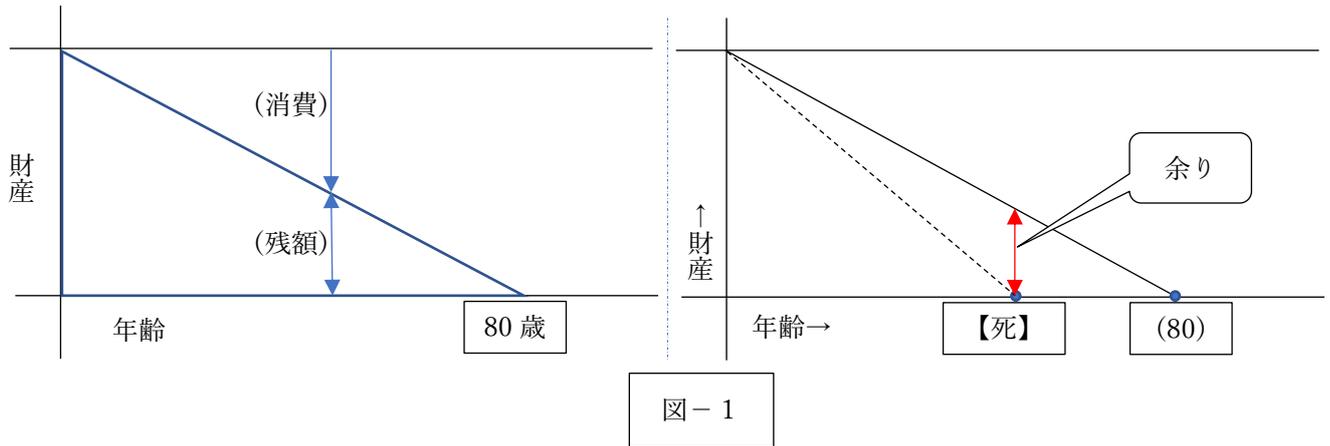


❖ 1 何時、あの世に逝くか？

例えば、図-1において、80歳であの世逝きを想定する。その時に私の財産を全部使い切る（自宅の土地・建物を除く）ように、エクセル（パソコン上）で消費（支出）と残財産の相関下降直線を描いて見ることもある。もしも、早死にしたらどうなるか、同図右側のように余ることになる。余るといことは、遺族に残して行くことになる、喜ぶのは遺族であることから、本当は早死は喜ばれることなのである。



逆に、遅死にした場合、つまり、長生きした場合はどうなるのか。生きていれば、毎年図-2のように、下降直線を見直し、ローリングして行くが、蓄財がどんどん減って行く。こうなると家族（遺族）はどう思うか。表面的な言葉では、長生きを喜んだ風に表すが、言葉に出さない内心は“何だ、これ

しか残さなかったのか”と嘆く。感謝どころか、恨み節に変節する恐れがある。

❖ 2 病気とどう向き合うか？

もう一つ、病気に備えたいという思いがある。大病に侵されても長生きしたいとの欲求で、日常生活費や遊興費とは別に積立・保険や蓄財するのが一般的である。ますます残額が膨らむ。この病気対応となると、今度は終末期の延命措置にどう向き合うかという難題がある。生前、家族に対して、終末期の延命措置の是非について明確に伝える人は余りいないということ。植物人間となりながらもずるずると命だけは繋がるようになる。ここで、やっと蓄えたお金が医療費となって消費（浪費・無駄遣い）される。“浪費とは失礼！ 立派な社会投資・社会貢献？”いやいや、病気になった初期に蓄財の全てを投入して完治を目指すという人もいる。その蓄財でも足りなくなる可能性があり、やがては家族の負担となって行くのである。様々なケースを想定出来る。

❖ 3 金の使い方と社会貢献とは？

今、思い出した。3回目の四国へんろにおいて、ある簡易郵便局に立ち寄った時のこと。その局長と立ち話の機会があり、その時に、私に対して「・・・なんだ、歩きへんろか?! この地域に郵便局が無く、欲しいという声が高まったので、私は定年退職後、この郵便局を立ち上げた、これは定年後

の社会貢献だ。」と話された。その話し方が、非常に自慢風で、遍路に対する偏見を感じた。私は自分の好きな事をしながらも、交通費や宿泊代や飲食代など身の丈の支出を通して、これも小さな社会貢献の一つを果たしていると思っているが、どうも、その局長に言わせると、そのようなものは社会貢献ではなく、人から頼まれて多額の資金投資事業こそがという趣旨の言いぶりであった、言わんとすることがよく理解出来なかったが。——貴方は、歩きへんろを自分もやりたいが諸事情があって出来ないことからのやっかみ・やきもちか？ 公を装った私利私欲のための利潤追求ではないのか、と言いたかったが……。——資本主義的事業をしないと社会貢献ではないという狭隘な見方であった。それでは、無償の愛での社会慈善事業を行っていることは社会貢献と言わないのか？と問うなど、色々意見し反論しようか、と思ったが、いちいち言ってもしょうがないので立ち去った。その局長の言い分は、まさに驕り高ぶりの典型である。後で考えると創価学会員の折伏行為だったのかな？

と感じた。吾が地域に散在するムレ・グルの「様々な数多の集まりの何とか会の長」ともどんぐりの背比べ、といったところであった。驕り高ぶりもその人の得意技だろうから、私が何かを言っても変わる者でもなく、相手にしなければ私が心の被害者（口喧嘩になるとか、自尊心が傷付くとか）になることもないので、相手にしないのが私の特技と離れた。

◆4 図-3中の息子さんの見識は、冷静で極めて正常であり納得する処である。

◆5 人それぞれ、私の生き方

戻って、そこで、次から二者択一、

- ① 蓄財を沢山残して、自分は無念を叫びながら！ あの世逝きか、、、しかし、遺族から喜ばれるかも？
- ② 蓄財を使い切って、自分は大満足しながら！ あの世逝きか、、、しかし、遺族からは憎まれるかも？

子供が3人いる私は果してどうすれば良いのか。

吾が人生のイニシアチブ (initiative) は吾にあり、

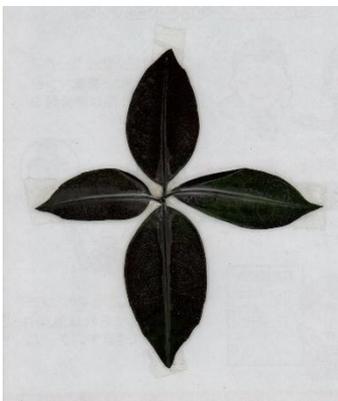


図-4

もちろん私は {②} と決めている。——（現在の手持ちの細やかな資産は、先祖伝来の物は一切なく、私達夫婦で築いたもの。）——こんなことをシミュレーションすると、楽しくなる。頭の活性化は、左右両極の場面を如何に多く、如何に極端に想像出来るかにある。頭の中で如何に大言壮語・誇大妄想を描くかである。これが私の“孤（個）を立て、個を磨く”方策である。

ところで、人間は生まれて死ぬ、逢えば別れる宿命にある。一期一会

は、生逢死別の十字路、交差点である。その象徴が十字対生のアオキ（図-4）である。逆に十字対生のアオキは生逢死別の象徴でもある。生逢死別の十字架を背負って生きている私である。

2018(H30)
12/13(木)
山新

半寿になり思う生き方

■天童市 大石浩子 80歳

半寿（数え年81歳）も間もなく終わりです。病気持ちなのでここまで生きられるとは思っておりませんでした。皆に感謝しております。

地域の役などいろいろなことをさせていただき、全部終わった時「これからは社会貢献もなく健康に気を付けて医療保険、介護保険を使わずに市のためにも」

「何も社会貢献もしないただ生きているだけで申し訳ないようだ」と息子に言ったら「老人の究極の社会貢献は金を使うことだ。金を使いなさい。何なら俺が使つてやるか。ふふふ」と笑われました。

とあいさつしましたが、見事に外れ医療保険も介護保険も使つて生きております。

図-3

(end)